HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮沢賢治「永訣の朝」におけるいくつかの疑問点について ： 教材化のための作品研究の試み
Author(s)	菅原, 誠
Citation	教授学の探究, 16, 175-191
Issue Date	1999-03-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13616
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_p175-191.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

宮沢賢治「永訣の朝」におけるいくつかの疑問点について

―― 教材化のための作品研究の試み ――

菅　原　　誠
（北海道教育大学研究生）

は じ め に

宮沢賢治「永訣の朝」は，1924年4月20日に関根書店から刊行された賢治の生前唯一の詩集『春と修羅』中の「無声慟哭」詩篇の冒頭を飾る作品である。賢治の代表作としてとりわけ高い評価を得ている作品であり，いくつかの高等学校の教科書にも採用されている作品である[1)]。

すぐれた教材として定評のある「永訣の朝」であるが，作品を読むと，疑問点（理解できない点，納得できない点）がいくつか出てくる。本稿では，主要な疑問点を提示し，その疑問に対する先行研究[2)]の見解をふまえた上で，自己の見解をしめす[3)]。作品中の疑問を解決するにあたり，以下に示す伝記的事実の他に，場合によって作者の思想・信仰や作品の推敲過程などの作家研究・作品研究の成果を反映させる。そのことで，より納得のいく解釈，深い解釈が得られると考えるからである。

さて，詩集の目次では，「永訣の朝」に1922年11月27日という日付が付されている。この日付は，賢治の妹トシが死んだ日と一致している。賢治26歳，トシ24歳であった。この作品は，その時の体験をもとに創作された作品であり，作品中の「わたくし」と作者賢治とは，同一人物と考えてよいだろう。このように考えた場合，作品に欠落している情報は，ある種の伝記的事実によって補うことができるのではなかろうか[4)]。

以下では，次のような伝記的事実を補って作品を読んでいる。賢治（わたくし）やトシ（とし子）の年齢のほか，トシは自宅で療養していたこと，また，賢治の実家は，地元花巻では「宮沢マキ（一族）」と呼ばれた資産家で，裕福な家庭であったこと，など。

［注］

1) 1998年3月現在出版されている高校の「現代文」「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」の教科書のうち，13社，39編の教科書を調べたところ，14編の教科書に「永訣の朝」が採用されている。

そのうち，初版本のテキストを採用しているのが5編，宮沢家所蔵手入れのテキストを採用しているのが9編であった。

2) ここでいう「先行研究」には，研究論文だけでなく，鑑賞，批評，エッセイなど「永訣の朝」に言及のある文献を含む。

3) 文学作品の読み方指導の主要な目標は，作品をより豊かに，より深く読みとることにあると考える。この目標を達成するため，北海道教育大学札幌校・教育内容方法研究室では，物語の読み方指導ではあるが，「疑問法」なる指導過程を提唱した。

「疑問法」では，「作品を読み解く過程」が，読みの中で「生まれた疑問を，読みの根拠を探る過程として解いていく学習」と一致するという見解を示している（津田順二「「疑問法」にもとづく読み方指導改善の試み」三沢正博教授退官記念論文集編集委員会編『歴史としての教育』1996年，北海道教育大学札幌校教育学科，178

頁)。この見解に示唆をえて，詩作品の読みの過程においても，「疑問の提示—解決」というパタンによって，作品の読みとりが可能であると考えた。

本稿の教材研究は，この「疑問法」の方法を踏襲している。

4) それでは，伝記的情報を補わなければ，作品（教材）を読むことはできないのか，という反論があるかもしれない。本稿では，そのような主張をするものではない。伝記的情報がなければ，情報の欠落箇所は，読み手の経験と想像力によって補われるだろう。

「永訣の朝」の場合，伝記的情報がなければ，「とし子」を子どもと解釈したり，貧乏でそれ以外に雪を盛る容器がなかったから「かけた陶椀」を持っていったと解釈することは大いにありえる。だが，そのような解釈も，間違いとはいえない。

このような解釈の相違は，きわめて興味深い問題を提起しているが，本稿の主題からそれるので，ここでは論じない。

1．テキストの選定について

「永訣の朝」には，初版本，宮沢家所蔵本手入れ，藤原嘉藤治氏所蔵本手入れの，少なくとも三つのテキストが存在する[1]。これらのうち，初版テキストと宮沢家所蔵本手入れテキストが一般に流布しており，完成度も高い。したがって，「永訣の朝」を教材とする場合，この二つのテキストのどちらかを選ぶことになるだろう。いずれにしても，どのテキストを選ぶかは，さけてとおれない問題である[2]。

両者のテキストの違いは，末尾にある。初版テキストでは，「おまへがたべるこのふたわんのゆきに／わたくしはいまこころからいのる／どうかこれが天上のアイスクリームになって／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに／わたくしのすべてのさいはいをかけてねがふ」と結ばれている。この箇所が，宮沢家所蔵本では「おまへがたべるこのふたわんのゆきに／わたくしはいまこころからいのる／どうかこれが兜卒の天の食に変って／やがてはおまへとみんなとに／聖い資糧をもたらすことを／わたくしのすべてのさいはいをかけてねがふ」と手入れされているのだ[3]。

初版と手入れ後のテキストを比較した場合，諸家の指摘するとおり[4]，手入れ後の方が韻律の上ですぐれており，作品の完成度も高くなっているのではなかろうか。

そのことを認めたうえで，しかし，教材としては初版テキストをとりたい。読み手の理解しやすさ，納得のしやすさを考慮した場合，初版テキストの方が，よりその観点を満たしていると思われるからである。

大塚は，「賢治が家の外に出てとってくる白い雪と，アイスクリームの色彩的，触感的関連性は，詩集出版形の方がより明確であり，また詩としての一貫性もあるだろう」と指摘する[5]。大塚の指摘のとおり，雪とアイスクリームとの「色彩的，触感的関連性」は「明確」であり，「詩としての一貫性」もある。納得がいくし，理解しやすい表現である。それに較べ，雪と「兜卒の天の食」との関連は必ずしも明確ではない。「ゆき」が「兜卒の天の食」に変わるというのは，抽象度が非常に高くなるため，理解がより困難になるのではなかろうか。

教材として選ぶ作品は，より理解でき，納得のできる作品であることが望ましいだろう。そのように考えた場合，教材としては「永訣の朝」は初版テキストに，さらに若干の手入れしたテキスト[6]がふさわしいのではないだろうか。

教材本文を，以下に示す。

永訣の朝

けふのうちに
とほくへいってしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふっておもてはへんにあかるいのだ
　　（あめゆじゅとてちてけんじゃ）※
うすあかくいっさう陰惨な雲から
みぞれはびちょびちょふってくる
　　（あめゆじゅとてちてけんじゃ）
青い蓴菜のもやうのついた
これらふたつのかけた陶椀に
おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがったてっぽうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした
　　（あめゆじゅとてちてけんじゃ）
蒼鉛いろの暗い雲から
みぞれはびちょびちょ沈んでくる
ああとし子
死ぬといふいまごろになって
わたくしをいっしゃうあかるくするために
こんなさっぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまっすぐにすすんでいくから
　　（あめゆじゅとてちてけんじゃ）
はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
…ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまってゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまっしろな二相系をたもち
すきとほるつめたい雰にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいいもうとの
さいごのたべものをもらっていかう
わたしたちがいっしょにそだってきたあひだ
みなれたちゃわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ

※(Ora Orade Shitori egumo)
ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あぁあのとざされた病室の
くらいびゃうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまっしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ
※(うまれでくるたて
こんどはこたにわりゃのごとばかりで
くるしまなあよにうまれてくる)
おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになって
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはいをかけてねがふ

註
※あめゆきとってきてください
※あたしはあたしでひとりいきます
※またひとにうまれてくるときは
こんなにじぶんのことばかりで
くるしまないやうにうまれてきます

[注]

1) テキストの異同は,『新校本宮澤賢治全集』第2巻（筑摩書房）を参照。

2) 菅野圭昭は,「永訣の朝」を「推敲によって変貌していく作品世界を丸ごと作品としてとらえ,教材化すること」を提案している（菅野圭昭『文学教材研究の方法論』1985年,明治図書,115〜116頁)。

だが,ここでは,一つのテキストをていねいに読みとることが重要であると考えるため,一つに選ぶことにする。

3) 賢治が「天上のアイスクリーム」から「兜卒の天の食」へと手入れした理由について,先行研究では,「〝天上のアイスクリーム〟は,詩句としては,モダニズムの軽さをおびて『永訣の朝』の悲痛なトーンにあわないから」「〝兜卒の天の食〟という,いかめしい仏語に一変した」とする会田綱雄の見解（会田綱雄「『無声慟哭』三部作」「ユリイカ」1970年7月号,91頁）や,「天上のアイスクリーム」では,過去にトシが入院した時,付き添っていた賢治がトシにアイスクリームを食べさせた思い出とオーバーラップすることから,「妹という一人の人間への個人的な執着（賢治はそれを修羅意識として捉える）が,かえって妹の『天人』への転生を妨げるかもしれないと賢治が恐れたため」変更したという大塚常樹の見解（大塚常樹「「永訣の朝」論」『宮沢賢治心象の宇宙論』1993年,朝文社,242頁）などがあげられている。

以上の推測が妥当としても,なぜ賢治は妹の転生先に「兜卒の天」を選択したのか,という疑問は残る。こ

の点については，賢治の「弥勒信仰」による兜率天往生の思想の反映とする池川敬司の見解がある（池川敬司「賢治と弥勒信仰」『宮沢賢治とその周縁』1991年，双文社を参照）。

池川は，賢治が極楽浄土ではなく兜率天を妹の転生先に選んだ理由に，「〈おまへ〉（彼岸）と同時に〈みんな〉（此岸）に〈兜率の天の食〉が〈聖い資糧〉をもたらすように，といった含意としての至福を満たすものは，極楽往生（思想）の彼岸への〈ゆききり〉に求めることはできず，兜率往生（思想）のそうした〈ゆき〉（彼岸）と〈戻る〉（此岸）」であったこと（同上65頁），「妹の女身のままの往生＝天女への転生」を願っていた（極楽は無色界であるため，成仏のさいには女人はいったん男身に変生しなければならない）こと（同上66頁）の二点をあげている。

この池川の見解に対して，大塚は，「極楽浄土」では父政次郎の信仰する浄土真宗とのつながりがさけられないこと（大塚前掲書244頁），より「利他行」への意志を強調する「兜率天」の方が，妹の転生先としてふさわしかったこと（同上245頁）の二点を理由に加えている。

4）例えば，草野心平は，「アイスクリームも悪くはない」が「訂正された方が厳粛でカッチリしていて『わたくしのすべてのさいはいをかけてねがふ』にふさわしい，と私も思う」と述べている。草野心平「無声慟哭（その解説）」天沢退二郎編『「春と修羅」研究Ⅰ』1975年，學藝書林，126頁。（初出は『無声慟哭・オホーツク挽歌』1953年，新潮文庫。）

5）大塚前掲書，242頁。

6）先述の「疑問法」形式による授業を，大学生対象に行った（授業者は三上勝夫）。

授業で使用したテキストは，次のように手入れしている。

26行目「□銀河や太陽，気圏などとよばれたせかいの」の一字下げは，印刷業者の勘違いなので，字下げを改める。また，原稿のとおり「，」を一字あけにする。

また，39行目「(Ora Orade Shitori egumo)」が字下げなしなのは，印刷用原稿を見る限り，指示間違いや校正ミスの可能性が否定できない。また，藤原氏所蔵の手入れ本には，賢治以外の筆跡ではあるが，三字下げの指示がなされている。したがって，本文とはことなるものの，この箇所を三字下げに変更することは許容範囲内であると判断し，三字下げにした。

初版形のままでは，次のような疑問が生じるだろう。なぜ26行目は一字下げになっているのか。他の括弧はすべて三字下げなのに，なぜ39行目だけ字下げなしなのか。このような疑問に拘泥することで，混乱を招くおそれがある。したがって，これらの箇所は，変更した方が望ましいと思われる。

また，印刷用原稿のように拗音，撥音を小文字にした。

なお，実際に授業で使用した教材は，ルビと「※」を省略した他，便宜上，何行目かを表す番号をふった。また，誤植により26行目「さいごの」が「最後の」となっている。

この授業の分析は，別に論じる予定である。

2．なぜ「わたくし」は陶椀を「ふたつ」もっていったのか

(1) 先行研究の概要

1つ目の疑問は，8～12行目にある。

青い蕈菜のもやうのついた
これらふたつのかけた陶椀に
おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがったてっぽうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした

もし「おまへがたべるあめゆき」をとることが目的ならば，もっていくお椀は「ひとつ」で十分であろう。なぜ「わたくし」はお椀を「ふたつ」もっていったのか。

この疑問を残して，先を読む。すると，19〜20行目に「こんなさっぱりした雪のひとわんを／おまへはわたくしにたのんだのだ」という表現が，また24〜26行目に「おまへはわたくしにたのんだのだ…そらからおちた雪のさいごのひとわんを」という表現がある。この表現から，妹が「ふたわん」頼んだわけではないこと，さらに「わたくし」自身も，妹はごく常識的に「雪のひとわん」を頼んだと認識していることが読みとれよう。疑問はさらに深まるのだ。

先行研究では，この疑問に対して，どのような見解を示しているのだろうか。そもそも「ふたつのかけた陶椀」とは「明らかに兄妹が幼少時に使ったお揃いの茶碗[1]」であるという点に，異論は出されていない。さらに「ふたつ」とは「自分ととし子の子供のころから共有した生の象徴」とする見解もある[2]。

さて，この疑問に対して，一つには，「二」という数詞がくりかえされる点に注目し，そのくりかえしの意味に言及する見解がある[3]。

> これらの「二」という数詞は，いうまでもなく精神的に一心同体だった自分と妹の二者を意識し，かつ今後別々の二つの生きかたを余儀なくされた運命をも暗示している。なおこの詩では直接歌われていないが，「松の針」や「無声慟哭」で露出する天上道と地上道へ引き裂かれる二者の矛盾の相克をも示している。(原子朗)

もう一つは，「陶椀」には兄妹の関係が投影されており，「ふたつ」や「かけた」という表現には兄妹関係の欠如を，逆に「ひとわん」という表現には兄妹の一体性を読みとろうとする見解がある[4]。

> 「ふたつのかけた陶椀」は，それゆえ，(あめゆじゆとてちけんじや)と告げたとし子と，それをそのまま，とし子が雨雪をたべたいのだと考えた賢治の，〈欠けた〉関係性だともいえるのである。そして，賢治がとし子の言葉の真意を掴んだとき，ふたつはひとつとなり，「雪のひとわん」となったのである。(平尾隆弘)

これらは，「ふたつのかけた陶椀」の「ふたつ」や「かけた」という表現が，何を意味（象徴）しているかを論じているといえよう。もちろん，その点の解明は極めて重要である。だが，そもそも，なぜ「陶椀」を「ふたつ」もっていったのかという問題には，直接答えていないのではなかろうか。

なぜ「わたくし」は陶椀を「ふたつ」もっていったのか。先行研究では，次の見解がある程度のようだ。すなわち，「半ば無意識的」という平尾の見解[5]と，「私ととし子との二人のためのふたつの茶わんとダブルイメージ」という宗左近の見解[6]である。

なお，相馬正一は，「あめゆじゅとてちてけんじゃ」が「妹トシの臨終時における直接的な台詞ではなく，高熱に喘ぐトシの姿を幼少時の回想と組み合わせて再構成した賢治の心象風景の中の出来事ではないかと思うのである[7]」と述べ，「わたくし」が現在「あめゆき（みぞれ）」を取りにいったのではないことを示唆する。

> 今これを，トシの生々しい今際の発言として考えた場合(略)，トシの求める雨雪を盛るのにどうして「ふたつのかけた陶椀」が必要なのか，という素朴な疑問が生じてくる。「青い蕈菜のもやうのついた」見慣れた茶碗は，明らかに兄妹が幼少時に使ったお揃いの茶碗であろう。雨雪を盛るだけならば，しかも「まがつたてつぽうだまのやうに」気が急いていたのであれば，手近の容器でもよかったはずである。この欠けて使えなくなった蕈菜模

様の二人の茶碗は，母が棄てずにしまい込んでおいたものだという。賢治は母屋まで行ってわざわざそれを取り出してきたのだろうか。もしもこの詩が堀尾氏の記すようにドキュメントそのものだとすれば，何とも不可解な場面である。

一歩譲って，仮にこの時賢治がトシを喜ばせるために思い出深い「ふたつのかけた陶椀」に雨雪を盛ってきたとしても，やはり幼少時の追憶と無関係ではあり得ない。「わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ／みなれたちやわんのこの藍のもやうにも／もふけふおまへはわかれてしまふ」という表現も，現世への訣別と同時に幼少時の追憶との別れを含んでいる[8]。

作品中のことがらが「ドキュメントそのもの」ではなく「幼少時の回想と組み合わせて再構成した賢治の心象風景の中の出来事」の可能性は，大いにありうる。そのことを認めたうえで，だが，「あめゆじゅとてちてけんじゃ」と頼まれて「このくらいみぞれのなかに飛びだした」と語っている以上，作品の読みとりのレベルでは，現在「ふたつのかけた陶椀」をもって飛びだしたと解釈すべきだろう。だからこそ，相馬の言うとおり「何とも不可解な場面」なのである。

(2) なぜ「ふたつのかけた陶椀」をもっていったのか

「わたくし」が手にした「ふたつのかけた陶椀」とは，先行研究の見解のとおり，兄妹ふたりが幼少時から長年使ってきたお揃いのお椀であろう。「青い蕈菜のもやうのついた／これらふたつのかけた陶椀」という表現から，このお椀がお揃いであり，またふたつとも欠けていると読める。さらに，36〜37行目「わたしたちがいっしょにそだってきたあひだ／みなれたちゃわん」という表現から，兄妹ふたりが幼いころから長年使ってきたお椀と読める。お椀が欠けているのは，幼少時から長年使ってきたためだろう。

裕福な賢治の家庭で「かけた陶椀」を使うとは考えにくい。幼少から使ってきたお椀であればこそ，欠けて使えなくなっても捨てずに食器棚に置いてあったのだろう[9]。「わたくし」は，「あめゆき」を盛る器をとるために台所へ行き，食器棚にある「ふたつのかけた陶椀」を手にした。

「わたくし」は，おそらく，半ば無意識のうちに思わず「ふたつのかけた陶椀」を手にしたのだろう。「まがったてっぽうだまのやうに…飛びだした」とある。非常に急いで，あわてて飛び出したはずだ。意図して「かけた陶椀」を「ふたつ」持っていこうとする余裕があったとは考えにくい。

それでは，なぜ「わたくし」は「ふたつのかけた陶椀」を手にしたのだろうか。ここには二つの疑問がある。一つは，考えるまでもなく「あめゆき（みぞれ）」を盛るのに欠けた茶碗は適さない。食器棚には他のお椀もあったはずである。にもかかわらず「わたくし」が「かけた陶椀」を手にしたのはなぜか，という点である。

これは，幼少時に使って「みなれた」お椀だったからこそ，「かけた陶椀」にもかかわらず，手がでたのであろう。だが，それだけだったら，お椀を「ふたつ」もっていく必要はない。二つ目の疑問は，なぜお椀を「ふたつ」手にしたのかという点である。

結論からいえば，「わたくし」がお椀を「ふたつ」手にしたのは，兄妹「ふたり」が「いっしょにそだってきた」からに他ならないろう。論者の言うとおり，二人には「あめゆき」をとって食べた過去があることも想像に難くない。「いっしょにそだってきた」過去があるからこそ，「おまへがたべるあめゆき」を取るためと自覚しているにもかかわらず，自分と妹二人の「ふたつ」の陶椀に思わず手が出たと考えるのが自然であろう。

「ふたつの陶椀」とは，先述のとおり，兄妹ふたりが幼少時から使い「みなれた」お揃いのお椀である。二つのお椀を「いっしょに」，まさに二椀を１セットとして使用してきたはずだ。その「ふたつ」のお椀のうち，妹の分だけを持っていくという行為は，「いっしょにそだってきた」二人が「いっしょ」ではなくなる，すなわち二人の永訣を行為として認めることに他ならない。如何に「おまへがたべるあめゆき」を取るためとはいえ，妹のお椀だけではなく，兄妹の「ふたつ」のお椀を持っていったところに，「わたくし」の無意識のこだわりがうかがえるのではなかろうか。

「わたくし」は，妹が「けふのうちに／とほくへいってしまふ」ことを認識している。また，自分が盛るみぞれが，もはや固形物をうけつけないほど衰弱していたであろう妹にとって，「雪と水とのまっしろな二相系」をたもつ「さいごのたべもの」になることも自覚している。つまり，「わたくし」は，妹の死が避けられないという事実を認識しうけとめているのだ。にもかかわらず，兄妹が幼少時に使った「ふたつの陶椀」を手にしてしまうところに，無意識の領域では，これまでと同じように「いっしょ」でありたいとする「わたくし」の割りきれなさ，妹との別れがたさが表現されているのではなかろうか。

「ふたつのかけた陶椀」をもっていくという行為には，最愛の妹との訣別，永訣を前にして，その事実をうけとめようとしながら，やはり心の奥ではうけとめきれないという，人間の心のあやが，巧みに表現されていると言えよう。まさに，人間の真実が暴き出されているのではなかろうか。

［注］

1) 相馬正一「鎮魂歌「永訣の朝」の虚実」「宮沢賢治」15号，1998年，106頁。

2) 宗左近・天沢退二郎「対談　無声慟哭から有声慟哭へ」での天沢の発言。(「國文學　解釈と教材の研究」1975年4月，20頁。)

3) 原子朗「永訣の朝」原子朗編『鑑賞日本現代文学第13巻　宮沢賢治』1981年，角川書店，174～175頁。
　他に和田隆一「「無声慟哭」私論」(「愛媛国文研究」1990年12月)，大塚常樹「「永訣の朝」論」(『宮沢賢治心象の宇宙論』1993年，朝文社）などが「二」が兄と妹を意味しているという見解を示している。

4) 平尾隆弘『宮沢賢治』1978年，国文社，157頁。
　なお，佐藤泰正は，平尾の見解を「すぐれた指摘」(41頁）と評価したうえで，「〈ふたつの椀〉」とは「〈信〉と〈エロス〉の相剋」の「象徴」であると述べている（43頁)。佐藤泰正「『永訣の朝』をどう読むか――諸家の論にふれつつ」『佐藤泰正著作集⑥宮沢賢治論』1996年，翰林書房。

5) 平尾前掲書157頁。「半ば無意識的」という見解には同意するが，なぜ「半ば無意識的」に「ふたつ」お椀をもっていったのかを解明することが重要ではなかろうか。

6) 宗・天沢前掲対談での宗の発言（21頁)。

7) 相馬前掲論文，101頁。
　ただし，相馬は，「あめゆじゅとてちてけんじゃ」が「この地方における幼児語もしくは幼児語の延長としての方言をもちいている」(97頁）と断定するが，この点には異論がだされている（池川敬司「四　賢治の鎮魂歌」『宮沢賢治とその周縁』1991年，双文社)。この言葉が「幼児語（の延長)」と断定するのは無理のようだ。
　ただし，池川も作品解釈レベルでは「その言葉に幼児期の思い＝幼児期の回想が込められているという部分については異論はない」とする（同上97頁)。
　なお，岡井隆も「妹の方はむしろ，幼少期に雪をすくつて食べた兄妹の遊びのなつかしい追憶をここに重ねてゐたのではあるまいか」と述べている（岡井隆「「永訣の朝」の表現の重奏性について」「宮沢賢治」第15号，11頁）

8) 相馬前掲論文，106頁。
9) 賢治の「年譜」を編纂している堀尾青史によれば，台所から二個の茶碗をとったとされる。(「「無声慟哭」の日」「啄木と賢治」第八号 1976年10月)

3．なぜ妹の頼みが「わたくしをいっしゃうあかるくする」のか

(1) 先行研究の概要

二つ目の疑問は，16〜22行目にある。

ああとし子
死ぬといふいまごろになって
わたくしをいっしゃうあかるくするために
こんなさっぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまっすぐにすすんでいくから

妹が「こんなさっぱりした雪のひとわん」を頼んだことが，なぜ「わたくしをいっしゃうあかるくする」ことになるのか。

先行研究には，まず，文字どおり「わたくし」を「いっしゃうあかるくするため」妹が「雪のひとわん」を頼んだのだ，とする見解がある[1]。

> とし子の病室にあって，賢治は（略）何をしてよいのか分からぬままにおろおろしている。とし子が（略）「あめゆきとつてきてください」と願う。賢治にとっては，（中略）彼が一生を「あかるく」過ごせるようにという心遣いと映る。とし子の願いは彼女の願いであって，そうでなく，賢治のための利他の行である。否！もう自分のため，他人のためなどでない大きな心遣いである。（丹治昭義）

この見解のとおり，「賢治にとっては」，妹が自分を「いっしゃうあかるくするため」に頼んだと「映った」ことは明らかだ。だが，そのことと，「わたくしをいっしゃうあかるくする」ことを妹自身が意図していたかどうかとは別である。

一方，妹が「わたくしをいっしゃうあかるくするため」に「雪のひとわん」を頼んだとするのは「独善的な独白[2]」「兄の側の一方的な解釈[3]」であり「自己を納得させることを目的とした《解釈》[4]」である，とする見解がある[5]。

読み手には，妹自身が意図して兄を「いっしゃうあかるくするため」に頼んだと読みとれる根拠は与えられてない。「はげしいはげしい熱やあへぎ」に苦しむ妹が，熱に乾いた喉を潤しさっぱりするために「雪のひとわん」を頼んだと考えるのが自然である。妹が意図していたとする根拠が読み手に与えられていない以上，「わたくし」が妹の頼みを一方的に「解釈」したのだと言えなくもない。

しかし，そうであっても，なぜ「わたくし」は，妹が「わたくしをいっしゃうあかるくするために」頼んだと「解釈」したのか，という疑問は残る。

第二に，妹の最後の願いに応えてやれたことが，「わたくしをいっしゃうあかるくする」こと

になったという見解がある[6]。

妹の死の直前に，彼女の要望にこたえてやったことによって，心のやすらぎを覚えるのである。もし，妹が彼に依頼することがなかったとしたら，あまり妹のために尽くしてやらなかったという暗い負い目を一生持ち続けなければならないことになる。(恩田逸夫)

だが，この見解では，妹から頼まれたものが水や薬であっても「いっしゃうあかるくする」ことになったのか，それとも「さっぱりした雪のひとわん」を頼まれたからこそ「いっしゃうあかるくする」ことになったのか，という点が不明確である。

第三に，妹から他ならぬ「雪のひとわん」を頼まれたことが，「わたくしをいっしゃうあかるくする」ことになったという見解がある[7]。論者によって，論点のおき方はことなるものの，雪が「銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの／そらからおちた」ものであることが，「わたくしをいっしゃうあかるくする」ことになったとする[8]。

例えば，小沢俊郎は「頼むために頼むのなら，何を頼んでもいいことになります。しかし，作者が一生明るくなれそうなのは，『こんなさつぱりした雪のひとわんを』妹が頼んだからです」と断言し，「⑳『こんなさつぱりした雪のひとわん』と，㉖㉗『銀河や太陽…雪のさいごのひとわん』が，同じものを言いかえたことは明らかです。だから，『さつぱりした』というのが，雪の形状だけに基づく気持ちではなく，それがどこから来たかということを含んでいる，とわかります。雪のルーツが問題だったのです。それを受けて，賢治の感動，感謝が生まれたと考えられます。」と述べ，以下の見解を示している。

瀕死の妹が雨雪を求めたのは，あるいは熱のある身体が水分を欲したという単純に生理的な理由だったのかもしれません。たとえそうであったにしろ，賢治はそれを，地球を超えた大宇宙，澄み切った広大な世界への希求と受けとめたのです。そう受けとめたから，救われる思いがし，ありがたかったのです[9]。

この見解は妥当といえよう。単に妹の頼みを実現したという行為だけではなく，「雪のひとわん」という頼みの内容にも言及しているからである。妹が頼んだ「雪のひとわん」とは「銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの／そらからおちた雪の…ひとわん」であると表現されている以上，「わたくしをいつしやうあかるくする」ことになった理由を「雪のルーツ」に求めることには根拠があるといえよう。

だが，この表現は，単に「そら」が「銀河や太陽　気圏などとよばれたせかい」に属していると述べているに過ぎない，とも言える。多くの読み手にとって，「雪のルーツ」を知ることがなぜ「わたくしをいっしゃうあかるくする」ことになるのか，納得しがたいのではなかろうか[10]。

(2) 妹が「雪のひとわん」を頼んだことが，なぜ「わたくしをいっしやうあかるくする」のか

単に妹の頼みを実現したという行為だけではなく，「雪のひとわん」という頼みの内容にも言及している点で，先行研究では第三の見解が妥当といえよう。だが，この「雪のひとわん」は，妹に食べさせるものである。その点をふまえて作品を読みすすめると，次の表現がある。

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになって
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに

わたくしのすべてのさいはいをかけてねがふ

「わたくし」は，妹の頼みを実現するために「雪のひとわん」をとりにいった。「わたくし」は，しかし，単に妹の頼みを実現しただけではない。妹が頼んだ「雪のひとわん」，妹がたべる「ふたわんのゆき」に対して，「こころから」祈り「すべてのさいはいをかけて」願うのである。「これが天上のアイスクリームになって／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに」と。

自己の「すべてのさいはいをかけて」祈り，願いを捧げた雪を妹に食べさせるという行為を通じて，「わたくし」は「とほくへいってしまふ」妹へのいわば手向けができたのではないか。そのことが「わたくしをいっしゃうあかるくする」ことになったのではなかろうか。

「わたくしのすべてのさいはいをかけてねがふ」とは，妹が食べる「ふたわんのゆき」が「おまへとみんなとに聖い資糧をもたらす」「天上のアイスクリーム」になるのであれば，自分の幸福はすべてなげうってもかまわないということであろう。ここで「わたくし」が賭けた「すべてのさいはい」とは，自分一人だけの幸福だったのではないか。裏を返せば，自分一人だけの幸福をなげうち，妹および「みんな」の幸福を願うということであろう。

「わたくし」は，この祈りの直前に「うまれでくるたて／こんどはこたにわりゃのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる（またひとにうまれてくるときは／こんなにじぶんのことばかりで／くるしまないやうにうまれてきます）」という妹の言葉を思い出している。この妹の言葉は，「じぶんのことばかりで」苦しんできた人生を悔い，今度生まれてくる時には，「じぶんのことばかりでくるしむ」のではなく，「みんな」のために苦しむような生き方をしたいという妹の願いを表現しているのであろう。「次生では自分のことだけではなく，人々のために苦しむような生き方をしたいというのは菩薩道にかなう崇高な精神です[11]。」（分銅惇作）「わたくしのすべてのさいはいを」賭けた祈り，願いとは，このような妹の願いに応えるものだったのではなかろうか。

ここで，もう一度，16〜22行目の表現に立ち返ってみよう。「わたくし」は「いっしゃうあかるくするために」「さっぱりした雪のひとわん」を頼んだ妹に対して「ありがたう」と感謝し，「わたくしもまっすぐにすすんでいく」ことを決意する。「わたくしをいっしゃうあかるくするために」頼んだ妹の頼みとは，「わたくし」に「まっすぐにすすんでいく」決意をさせうる頼みだったのである。

妹トシ没後に書かれたと推測される賢治作品には，「まっすぐにすすんでいく」といった決意が，しばしば登場する[12]。それらの作品では「みんなの本当の幸福を求めるために進む」といった意味合いで使用されており，さらに「手紙四」では，それは「ナムサダルマプフンダリカサスートラ」＝法華経であるとされる。賢治作品における「まっすぐにすすむ」決意の意味をふまえるなら，「永訣の朝」の決意にも，同様の意味が付与されていると考えるべきだろう。

法華経信者の賢治にとって，妹トシが「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」（「無声慟哭」）であったことは，周知のとおりである。「わたくしのすべてのさいはい」を賭ける，つまり，自分一人だけの幸福をなげうち「みんな」の幸福を願う，そのような生き方は，おそらく妹トシとともに何度も誓い合ってきたのではないか。「わたくし」の妹に対する感謝とは，そのような生き方を，妹の臨終に際して再確認できたことへの感謝と考えるべきではなかろうか。

「永訣の朝」の16〜22行目と，末尾の「わたくし」の祈りとは密接に関連しているといえよう。なぜ「雪のひとわん」を妹が頼んだことが「わたくしをいっしゃうあかるくする」ことに

なるのか。この16〜22行目の疑問は，26〜27行目に，さらに末尾の祈りに，その解決を見いだすことができるのではないか。

作品中に生じた疑問がその場で解決される訳ではない。この疑問を疑問として残したまま「読みつなぐ」ことによって，その疑問に解決を与える箇所を見いだす場合がある。この作品は，このように，問いと答えの構造をもっていると考えるべきだろう。この構造は，おのずから「読みつなぐ」ことを求めるといえよう。

もちろん，上記考察が先行研究の見解を凌駕するものとは考えていないが，ありうる読みのひとつには登録してもらえるのではなかろうか。

［注］

1) 丹治昭義『宗教詩人宮澤賢治』1996年，中公新書，71〜72頁。妹自身に意図があったとする見解は，他に，佐藤泰正「『永訣の朝』をどう読むか —— 諸家の論にふれつつ」『佐藤泰正著作集⑥宮沢賢治論』1996年，翰林書房などがある。

なお，「(あめゆじゅとてちてけんじゃ) の一言に包まれたいもうとの，痛ましい自己放棄の構造」とする芹沢俊介の見解（芹沢俊介「『無声慟哭』ノート」『宮沢賢治の宇宙を歩く』1996年，角川選書。初出は「磁場」第三号，1975年11月)や，「賢治は，じぶんがとし子に投げかけたことばを，ほんとうはとし子がじぶんに与えてくれたことばだと考えたのである。(略)このとき，『ひとり』ゆくとし子は救われる。(略)。なぜなら，とし子は（わりやのごとばかり）で苦しんだのではないからだ。」とする平尾隆弘の見解（平尾隆弘『宮沢賢治』1978年，国文社）もある。

2) 天沢退二郎『新増補改訂版　宮沢賢治の彼方へ』1987年。引用はちくま学芸文庫版，1993年，177頁。

3) 木嶋孝法「『無声慟哭』詩篇の成立」(「試行」1995年5月，68頁。)

4) 大塚常樹「「永訣の朝」論」『宮沢賢治　心象の宇宙論』1993年，朝文社，238〜239頁。

5) 古くは吉田精一が「こういう解釈が正しく妹の気持ちをくんだものかどうかは誰も言えない。それは作者のひとり角力だったかも知れない」と指摘している。(吉田精一「宮沢賢治」『吉田精一著作集第15巻　日本近代詩鑑賞下』1980年，桜楓社，157〜158頁。初出は「国文学　解釈と鑑賞」1947年12月号)

6) 恩田逸夫「注釈」『日本近代文学大系　第36巻　高村光太郎・宮沢賢治集』1971年，角川書店，348〜349頁。同様の見解に，紀野一義「賢治文学と法華経」『宮沢賢治と法華経』1960年，普通社（復刻版は国書刊行会，1987年)，荒川法勝『宮沢賢治詩がたみ　野の師父』1968年，宝文館などがある。

7) 雪の質に言及し，「雪の冷たい明るさ」が「わたくしをいつしやうあかるくする」という見解もある。(宗左近『宮沢賢治の謎』1995年，新潮選書，25頁)

8) このような見解を示す文献に，長谷川泉「永訣の朝　宮沢賢治」(『近代詩鑑賞』1967年，有信堂)，分銅惇作「永訣の朝 —— 愛と死と祈りのうた」(『新装改訂版　宮沢賢治の文学と法華経』1987年，水書房)，松原正義「まとめ」杉浦静・藤野功二・松原正義「「永訣の朝」作品論と教材論」(東京教育大学国語国文学会「国文学言語と文芸」1990年9月）などがある。

他に「陶椀に受けいれた雪は，天から送られた浄らかな食べ物」であり「この天のおくりものを死の床にはこぶことは，作者の悲しみを救うただ一つの儀式だったのである」とする見解もある。(伊藤信吉『現代詩の鑑賞』(下)1954年，新潮文庫，57頁)

9) 小沢俊郎「一　詩教材の研究と指導」『国語教材研究シリーズ4　詩編』1979年，桜楓社，16〜17頁。

10) なお，「『銀河や太陽　気圏のせかい』ではない。あくまでも，『などとよばれた』世界なのである。つまり賢治はそこで，人々の目にはただの銀河であり空であり気圏である世界が実は仏の住むきよらかな空間であることを言外に込めている」という解釈もある。(柴田まどか「雪に託した賢治の願い」「宮沢賢治」第15号，1998年，76頁)

11) 分銅惇作『宮沢賢治の文学と法華経』新装改訂版1987年，水書房，145頁。

12)「永訣の朝」とのモチーフ上の関連が指摘される「手紙四」や「銀河鉄道の夜」(初期形第三稿)に,「まつしぐらに進む」「まっすぐに進む」という表現がある。

チユンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇気を出してすべてのいきものののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルマプフンダリカサスートラといふものである。チユンセがもし勇気のあるほんたうの男の子ならなぜまつしぐらにそれに向って進まないか。(「手紙四」)

「僕きっとまっすぐに進みます。きっとほんたうの幸福を求めます。」ジョバンニは力強く云ひました。(「銀河鉄道の夜」初期形第三稿)

このように,賢治作品では,「まっすぐにすすむ」という表現が「みんなの本当の幸福を求めるために進む」といった意味で使用されており,さらに,「手紙四」では,それは「ナムサダルマプフンダリカサスートラ」=法華経であるとされる。

賢治作品における「まっすぐにすすむ」決意の意味を考慮するなら,「永訣の朝」における「まっすぐにすすむ」という決意も,「みんなの本当の幸福を求めるために進む」といった意味合いでもちいていると考えることができるのではなかろうか。

なお,瀬谷耕作も,同様の見解を示している。「『永訣の朝』の『まつすぐに』と,この(引用者注:「手紙四」の)『まつしぐらに』は同義と見られる。『すべてのいきもののほんたうの幸福』を求めて行動することを意味する。」(瀬谷耕作「宮沢賢治「永訣の朝」」増淵恒吉ほか編『国語教材研究講座:高等学校現代文』中巻,1983年,有精堂,49頁)

4 なぜ「Ora Orade Shitori egumo」だけがローマ字表記なのか

(1) 先行研究の概要

三つ目の疑問点は,なぜ「Ora Orade Shitori egumo」だけがローマ字で表記されているのか,という点である[1)]。

先行研究には,第一に,「Ora Orade Shitori egumo」だけをローマ字にした賢治の意図を,推敲過程の検討を通して推測するというアプローチがある[2)]。

周知のとおり,括弧の箇所は,草稿では最初すべてひらがな表記だったが,その後「おらおらでしゅとり行ぐも」と「うまれでくるたて…」がローマ字表記に変更される。だが,初版本の段階で「Umarede Kurutate…」の箇所がひらかな表記に改められ,「Ora Orade…」だけがローマ字表記とされた。

原子朗は,「Ora Orade…」以外をひらがな表記に改めたのは「ローマ字ではよけい判読しにくくなる」ことへの配慮であるとする。「その点『(Ora Orade Shitori egumo)』はまだわかりやすく,このほうが音感的におもしろく,しゃれている[3)]。」

池川敬司は,「賢治のローマ字表記は,〈音素〉単位に分化してまで,表現としての地方語の音韻を重視しようとする意図が認められる[4)]」と述べる一方,「このローマ字を含む推敲全体を,音韻面だけでなく,今度は推敲時の賢治の内面の問題として考えた」場合,「充分賢治の,妹とし子の言葉(地方語)への慎重な配慮を示している」と同時に「妹の《いのり》に動揺している心の裏返しではなかったのか[5)]」と推測する。

木村東吉は,「ひらがな→ローマ字」は「音声のまま残したい」ためであり,「ローマ字→ひらがな」は「ローマ字のよそよそしさから,再びもとに戻したのではないか」と推測する[6)]。

このような推敲過程からの推測は,ローマ字表記による表現効果を考える一つの材料とはな

るだろう。

ローマ字表記による表現効果を論じているものとしては，「強調[7]」とする恩田逸夫の見解がある。

第二に，妹とし子がこの言葉にこめた意味を考察した研究がある。

萬田務は，とし子の「Ora Orade Shitori egumo」という「決意」とは「死に行く者と残された者との別れといったような単純なものではなく，法華経を信仰する賢治への訣別に他ならなかったのではないか」という見解を示している[8]。

また，「Ora Orade Shitori egumo」が，賢治が読んだ（と思われる）経典をもとにしていると推測し，その出典となった（と思われる）経典をふまえて，言葉の意味を解明するアプローチがある。工藤哲夫は『國譯大藏經』所収「國訳大品　受戒篇第一」の「二人同一路を行く事なかれ」という一節（〈仏法〉と略称）から，「トシとの別れに際して賢治に課せられた宿命は，この〈仏法〉の実践という試練であった。『([O]ra Orade Shitori egumo)』（「永訣の朝」）は，トシが単に今から死ぬというだけの意味ではなく，賢治から受けたであろう薫染の成果を実践しようとしていることを表わす。」と述べる[9]。

一方，高橋直美は，『國譯佛説無量壽経』の一節の「文意が底に秘められているように思う。言いかえれば，自分は成仏できないのではないかと言うトシの悲痛な思いがこの一文に込められている」と述べる[10]。

第三に，「わたくし」がこの言葉をどのように受けとめたのかを考察した研究がある。先行研究では，兄妹「ふたり」「いっしょ」という意識を断ち切る非常に衝撃的な言葉としてうけとめたとする見解が，主流のようである[11]。

その中で，いまのところ最も有力なのが，小沢俊朗の見解である。小沢は「異質の言語として，聞いた瞬間には意味の通じないことばとして，賢治はそれを聞いた」という見解をしめしている[12]。小沢の見解は，今日，定説となっているようだ。

小沢は，次のように述べる。ローマ字は「音だけを感じさせる文字」であり，したがって「Ora Orade Shitori egumo は，そのことばが賢治の耳に音としてだけ響いたことを示しているのであろう」「それほど，聞き手賢治の気持ちにとって異質のものだった，ということになる。」この言葉が賢治の気持ちと異質であったのは「とし子は，自分の死をはっきり見つめ，正面から死に対峙していた」のに対し，賢治の方は「いわば，とし子を思う自分の感情に溺れようとしていた」ためである，という[13]。

> だから，「Ora Orade Shitori egumo」という，先ほどのことばが耳底に響いたとき，それは，人間は究極一人で死んでゆかなければならぬという絶対的な意味の重さを賢治に痛感させた。いっしょに，という思い，感情の溺れは拒否され，その拒否の正しいことを賢治は認識しなくてはならなかった[14]。

この他に有力な見解として，「おそろしい現実」（芹沢）であり「異邦からきたような戦慄的なことば」（平尾）であるために，賢治はどのような「日本文字」にすることもできなかったためであるとする芹沢俊介[15]，平尾隆弘[16]の見解をあげることができよう。

なお，西郷竹彦氏にお会いした際に，氏に直接うかがったところ，次のような趣旨の見解をいただいた。妹は兄である賢治を安心させるためにこの言葉を発した。だが，賢治はこの言葉を聞いて，妹に突き放されたと感じ，衝撃をうけた。ローマ字表記は，この言葉を聞いての衝撃を表現しているのではないか，と。

さて，これらの見解とは対照的に，荒川法勝は次のように述べる。

しかも妹の死に対して，自分の使命の誓いをたて，「わたくしもまっすぐ（ママ）すすんでいくから」と応え，その行は，さらにローマ字の「おらおらでしとりえぐも」というトシの言葉で関連させていく[17]。

どのように「関連」するのかに言及がないものの，「わたくしもまっすぐにすすんでいくから」と「Ora Orade Shitori egumo」との「関連」を指摘した点で評価できよう。

岡井隆も，次のような見解を示している。

これもトシの言葉ととつていいやうにみえるが，疑問は残る。なぜローマ字表記にしたのか。これはまた第三の意識が顔を出してゐるので「ありがたうわたくしのけなげないもうとよ／わたくしもまつすくにすすんでいくから」（二十一行，二十二行）を再確認したのではないか。賢治とトシはこの作品ではほとんど一体となつてゐるから，どちらの声を詩化したともいへるが，（Ora Orade Shitori egumo）は，どちらかといへば賢治の独自（内心の声）ではないか[18]。

「賢治の独自」というのは言い過ぎであろうが，「わたくしもまっすぐにすすんでいくから」の「再確認」とするのは妥当であろう。

(2) なぜ「Ora Orade Shitori egumo」だけがローマ字表記なのか

「Ora Orade Shitori egumo」の発話主は，他の括弧の箇所との整合性からいっても，妹とし子と判断して間違いない。とし子が自分の死を悟ったとき，「いっしょにそだってきた」兄に対して，兄と一緒ではなく，一人あの世へ行く決意を伝えたのだと思われる。西郷氏も述べるとおり，妹は「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくし」（「無声慟哭」）を安心させるために発したのではなかろうか。

一方の「わたくし」は，ひん死の妹を看病する病床でこの言葉を聞いたのであろう。この言葉は，死なないでほしいと願う「わたくし」の未練を断ち切る言葉であり，聞いたとき「わたくし」は激しい衝撃を受けたに違いない。妹のこの言葉に接した時点での「わたくし」の衝撃が，違和感のあるローマ字表記に残されているのではなかろうか。

なぜ「Ora Orade Shitori egumo」だけがローマ字表記なのかという疑問については，これが最も妥当な解答であろう。

だが，作品に出てくる「Ora Orade Shitori egumo」という言葉は，病床で直接耳にしているのではない。「おもて」にいる「わたくし」が心中に思い出した言葉である。

作品中での「わたくし」は，妹が「けふのうちに／とほくへいってしまふ」と述べ，妹の死が不可避であることを認識している。さらに，妹が「死ぬといふいまごろになって／わたくしをいっしゃうあかるくするために」「雪のひとわん」を頼んだことに感謝し，「わたくしもまっすぐにすすんでいくから」と決意しているのである。したがって，作品の中で「Ora Orade Shitori egumo」という言葉を思い出している時点では，「わたくし」は妹の死を認識し，受けとめているのではなかろうか。

「わたくし」は，「ちゃわんのこの藍のもやうにも／もうけふおまへはわかれてしまふ」と述べ，今日限り別れてしまう妹のことを思いやっている。その時，妹が「Ora Orade Shitori egumo」と決意していることを思い出すのである。「わたくし」は，この言葉を思い出すことによって，「ほんとうにけふおまへはわかれてしまふ」ことを改めて認識する。作品中，この言葉

を思い出している時点では，「わたくし」の意識と妹の言葉とは，むしろ「同質」だったと言うべきであろう[19]。

今まで「ふたり」で「いっしょにそだってきた」兄妹であるが，「けふ」限り天上と地上とに別れてしまう。ふたりの「永訣」を前にして，兄である「わたくし」は「まっすぐにすすんでいくから」と決意し，妹とし子は「Ora Orade Shitori egumo」と決意する。このような決意に，兄妹ともに「永訣」という事態を正面から受けとめていることがうかがえよう。

ある実践では「Ora Orade Shitori egumo」が，賢治の発した言葉でもあるとする読みがなされた[20]。発話者が「わたくし」でもあると読むのは無理があるものの，このような読みがなされたことに根拠がないわけではない。「Ora Orade Shitori egumo」は，「わたくし」の意識でもあるのだから。

そして，読者は，あたかも「わたくし」が妹の枕辺で衝撃的に聞いたと同様，この言葉に衝撃を受けるはずである。この言葉によって，初めて妹が自己の死を悟り「Shitori egu」覚悟ができていることを知るからである。さらに，ローマ字表記されていることで，より強い印象を受けることになるのだ。

［注］

1) 作品中に方言を使用しローマ字表記する方法は，賢治が初めて用いているわけではない。賢治が語法の上で影響をうけたとされる北原白秋の影響が指摘されている。白秋の詩集『思ひ出』（1911年6月）中の作品に既に使用されている。境忠一『宮沢賢治の愛』1978年，主婦の友社，105頁を参照。

2)「Ora Orade Shitori egumo」がローマ字表記なのは，「アヴェ・マリア」の一節「ora pro nobis（我らのために祈りたまえ）」を下敷きにしているためだ，とする論もある。松浦由紀「宮沢賢治「永訣の朝」に関する一考察 —— ローマ字表記をめぐって ——」（「豊田工業高等学校専門学校研究紀要」第23号，1990年），浅田秀子「日本語のすばらしさ ——「永訣の朝」に教えられたこと」（「宮沢賢治」第12号，1993年）

3) 原子朗「永訣の朝」原子朗編『鑑賞日本現代文学第13巻　宮沢賢治』1981年，角川書店，174頁。

4) 池川敬司『宮沢賢治とその周縁』1991年，双文社，87頁。

5) 同上，88～89頁。

なお，「Ora Orade Shitori egumo」だけがローマ字表記になっている意味については，小沢俊郎の論文をさして「詳細はそれにゆずる」と述べている（同書93頁）。

6) 木村東吉「文学教育論ノート ——『永訣の朝』の理解に触れて ——」（島根大学教育学部教科教育研究会編「教科教育研究論集」第6集，1992年3月，七頁）。

7) 恩田逸夫「注釈」『日本近代文学文系　第36巻　高村光太郎・宮沢賢治』1971年，角川書店，349頁。

8) 萬田務「「永訣の朝」の解釈について」『宮沢賢治　自然のシグナル』1994年，翰林書房，169頁。

9) 工藤哲夫「『黄色のトマト』 ——〈二人だけ〉の世界 ——」（「国文学　解釈と鑑賞」1996年11月号，80～81頁。）

10) 高橋直美「「無声慟哭」「オホーツク挽歌」作品群の解釈をめぐるいくつかの問題点」（「宮沢賢治研究Annual」第2号，1992年3月，292頁）

なお，高橋の引用箇所は次のとおりである。「また衆（もろもろ）の寒熱を結びて痛（つう）と共に居（こ）す。或時はこれに坐（よ）りて身を終へ命を夭（ほろ）ぼす，肯（あへ）て善を為し道を行ひ徳に進まず，壽（いのち）をはり身死して當にひとり遠く去るべし。」（下線は高橋）

11) このような見解を示している文献に，栗原敦「「ふたつのこころ」考 ——『無声慟哭』三部作の「死」をめぐって ——」（「立正女子大学国文」2号，1973年3月，68頁），松浦静「「永訣の朝」について—時間・場と括弧—」「「永訣の朝」作品論と教材論」（東京教育大学国語国文学会『国文学言語と文芸』1990年9月，33～34

頁)，藤野功二「『永訣の朝』の授業」(同上，45頁) などがある。

12) 小沢俊郎「Ora Orade Shitori egumo」『小沢俊郎宮沢賢治論集2　口語詩研究』1987年，有精堂，16頁。なお，初出は「賢治研究」1974年6月号。

13) 同上，15～16頁。

14) 同上，17頁。

15) 芹沢俊介「『無声慟哭』ノート」『宮沢賢治の宇宙を歩く』1996年，角川選書，212頁。なお，初出は「磁場」第3号 (1975年11月)。

16) 平尾隆弘『宮沢賢治』1978年，国文社，153頁。

17) 荒川法勝『宮沢賢治詩がたみ　野の師父』1968年，宝文館出版，61頁。

18) 岡井隆「「永訣の朝」の表現の重層性について」(「宮沢賢治」第15号，1998年，11～12頁)

19) したがって，恩田が指摘するように「『egu行く』という語が中心になって，前と後の行の『わかれてしまふ』に呼応する」と考えるのが妥当だろう (恩田前掲論文)。少なくとも，作品中で思い出した時点では「〈語り手〉の〈ふたり〉という意識を断ち切る衝撃的な言葉として感受された」(杉浦前掲論文) とは考えにくいのではなかろうか。

20) 大西忠治『入門・科学的「読み」の授業』1990年，明治図書，160～187頁を参照。

[付記]
本稿は，1998年北海道教育学会自由研究発表の一部に，加筆修正したものである。